

βλασφημία

ブラスフェミア

知っておきたいキリスト教のことば (188)

冒瀆 ほうとく

「冒瀆」とは、本来尊ぶべき神聖なものや価値あるものを軽んじたり汚したりする行為を指す言葉です。「悪口」や「侮辱」とは違い、特に宗教や文化、歴史や歴史上の人物に対して使われることが多いようです。

レビ記 24 章 10～23 節には、「神の御名を冒瀆する者」という物語が載せられています。あるところに、イスラエル人を母とし、エジプト人を父に持つ男がいました。彼は他の人と争っている中で、主の御名を口にして冒瀆したそうです。すると主はモーセにこう言われました。

神を冒瀆する者はだれでも、その罪を負う。主の御名を呪う者は死刑に処せられる。共同体全体が彼を石で打ち殺す。神の御名を呪うならば、寄留する者も土地に生まれた者も同じく、死刑に処せられる。(レビ記 24: 15～16)

神さまの名を軽んじたり汚したりするだけで、石打ちの刑で死刑になる。ものすごく厳しいことだと思わないでしょうか。旧約の時代の人たちが、うかつに主の名を唱えなかった理由が分かる気がします。

イエス様はご自分の裁判のときに大祭司から、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と聞かれたときに、こう答えました。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」と。

イエス様がご自分を神さまと等しい存在として語ったために、大祭司はイエス様を「冒瀆」の罪で裁きました。それほどまでに、「御名が崇められる」ことは、大事なこととされていたのです。

その思いを大切にしながら、主の祈りを唱えましょう。

次回は「牧師」です。お楽しみに。



「イエスとカファルナウムの中風の人」
サンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂
モザイク画

(6 世紀)

「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
(マルコによる福音書 2 章 7 節)

